

讀前後
唱和詩

龍鍾校正騎驢日、
龍鍾せり校正驢に騎る日、
顛頼通江司馬時、
顛頼せり通江司馬の時。

江州。

若竝如今是全活、
若し竝ぶれば如今是れ全活。

紆朱拖紫且開眉、
朱を紆ひ紫を拖着て且眉を開く。

【詩意】身老いて歳の暮に遇へば一入相思ふ情が深く、ただ悲吟するより外はない。夜寝ても眠りもせず、君と唱和した十年間の詩を燈前に讀み盡した。昔は相俱に校書郎となり、出入に驢馬に乗つてあるいたものであつたが、その後君は通州、僕は江州の司馬に貶せられて、尾羽打枯らしてゐた。若し其れに比ぶれば今日は餘程生きばえがあがつた方で、お互に朱紫をまとうて先づ先づ愁眉を開いてゐる。

歲日家宴戲示弟姪等兼呈張侍御二十八丈
殷判官二十三兄

歲日家宴。戲れに弟姪等に示し、兼ねて張侍御二十八丈、殷判官二十三兄に呈す。

弟妹妻孥小姪甥、
弟妹妻孥小姪甥、
嬌癡弄我助歡情、
嬌癡我を弄して歡情を助く。
歲蓋後推藍尾酒、
歲蓋は後に藍尾の酒を推し、
春盤先勸膠牙錫、
春盤は先づ膠牙の錫を勸む。
形骸潦倒雖堪歎、
形骸潦倒歎するに堪へたりと雖も、
骨肉團圓亦可榮、
骨肉團圓亦榮とす可し。
猶有誇張少年處、
猶少年に誇張する處有り、
笑呼張丈喚殷兄、
笑ひて張丈を呼び殷兄を喚ぶ。

【字解】(一) 歲日 正月元日。
(二) 張侍御二十八丈 侍御は官名。二十八は輩行。丈は尊稱。
(三) 妻孥 妻子。
(四) 嬌癡 頑是なきこと。
(五) 歲蓋 元日を祝ふ酒杯。
藍尾酒とは元日に屠蘇酒を飲むに少者より始まりて老者に至る。その最後の酒をいふ。
(六) 春盤 元日の御馳走。四時實盤に、立春日、唐人作春餅、生菜、餛飩三盤とある。膠牙錫は奥歯にればりつく餡。
(七) 團圓 團圓老衰なり。
(八) 團圓 團圓なり。

【題義】元日に自宅で祝宴を開き、戲れに弟姪等に示し、併せて張侍御と殷判官とに呈したといふのである。

【詩意】妻子や弟妹幼少な姪甥などが寄り集まり、頑はない事を言つたりしたりして我が歡情を添

律詩 歲日家宴戲示弟姪等兼呈張侍御二十八丈殷判官二十三兄

へる。最年長者なので祝の酒は最後にまはされるが、春盤だけは誰よりも先に餽を勧める。大分老衰して歎息に堪へないが、一家團樂の樂を盡すことの出来るのは榮とするに足る。猶も小供等に對して威張らうとの腹で、張君を呼んだり般兒を喚んだりして氣勢を添へた。

正月三日閒行

正月三日閒行

黃鸝巷口鶯初語

黃鸝巷口鶯初めて語り、

烏鵲河頭氷欲銷

烏鵲河頭氷銷せんと欲す。

黃鸝坊名。烏鵲河名。

綠浪東西南北水

綠浪東西南北の水、

紅欄三百九十橋

紅欄三百九十の橋。

蘇之官橋大數。

鴛鴦蕩漾雙雙翅

鴛鴦蕩漾す雙雙の翅、

楊柳交加萬萬條

楊柳交加す萬萬の條。

借問春風來早晚

借問す春風來ること早晚、

【字解】「早晩」いつ。

只從前日到今朝

只前日より今朝に到る。

【題義】正月の三日に閑遊した狀景を敍した詩である。

【詩意】黃鸝巷のあたりでは鴛鴦が啼き始め、烏鵲河のほとりは氷が解けかかった。東西南北いづれを見ても綠の浪ならぬはなく、紅の欄干の橋が三百九十もある。水の面には番の鴛鴦が翅をならべて遊ぎまはり、橋の袂の青柳は幾萬といふ多くの枝を垂れてゐる。さて春風はいつから吹き初めたかといふに、ほんの昨日から吹き始めたのである。

夜歸

夜歸

逐勝移朝宴。留歡放晚衙。

勝を逐ひて朝宴を移し、歡を留めて晚衙を放つ

賓僚多謝客。騎從半吳娃。

賓僚は謝客多く、騎從は半吳娃。

到處銷春景。歸時及月華。

到處春景を銷し、歸る時月華に及ぶ。

城陰一道直。燭焰兩行斜。

城陰一道直く、燭焰兩行斜なり。

東吹先催柳。南霜不殺花。

東吹先づ柳を催し、南霜花を殺らさず。

皐橋夜酤酒。燈火是誰家。

皐橋夜酒を酤る、燈火是誰が家ぞ。

律詩 正月三日閒行 夜歸

【字解】【一】勝、よき景色。【二】放、晚衙、晚衙をやめること。晚衙とは夕方幕吏が長官の前に集りて政務を報告するなり。
 【三】謝客、謝靈運の如き山水の遊を好む人。靈運小字は客兒。【四】吳娃、吳の美人。【五】月華、月なり。【六】東吹、春風。
 【七】阜橋、江蘇省吳縣の閶門の内に在り、吳の阜伯通其側に居たり。

【題義】春の夜に自宅に歸る時の光景を敘した詩である。

【詩意】景勝の地を選んで朝から宴會を開き、歡興を失ふことを恐れて晚衙をやめることにした。我に伴ふ賓友は皆謝靈運の如き風流人で、馬に乗つて従ふ者は半は吳の美妓である。(堯山堂外紀に、唐時杭妓、燕會に承應すれば皆馬に騎りて以て従ふを得とある。杭州ばかりでなく蘇州でもさうなのであらう。)どこへ行つても一日中遊び暮して歸りはいつも月が出る。蘇州の城陰には一筋の道が真直に通じてゐて、兩側の民家には燭火が赤赤と續いてゐる。東風が吹いて柳の芽を催し、薄霜が降るけれども花を枯らす程ではない。阜橋の袂の燈火の見える所は酒屋らしいが、何といふ酒屋であらうかしら。

自歎

自歎

豈獨年相迫、兼爲病所侵。
 春來痰氣動、老去嗽聲深。
 眼暗猶操筆、頭斑未挂簪。

豈獨り年の相迫るのみならんや、兼ねて病の侵す所となる。
 春來りて痰氣動き、老い去りて嗽聲深し。
 眼暗くして猶筆を操り、頭斑にして未だ簪を挂けず。

因循過日月、眞是俗人心。

因循して日月を過す、眞に是れ俗人の心。

【字解】【一】掛、冠をとめる簪を掛ける。即ち官を辭して退くこと。【二】因循、ぐづぐづしてゐる。

【題義】自ら衰老を嘆いた詩である。

【詩意】ただ年が迫つたばかりでなく、病にさへ侵され、春が來てからやたらに痰が出るやうになり、咳ばらひの聲も深くなつた。視力が鈍つても猶筆を操ることをやめず、頭が胡麻鹽になつても尙官を退かない。ぐづぐづして日を送つてゐるのは全く俗人である。

郡中閒獨寄微之及崔湖州

郡中閒獨寄微之及崔湖州

少年賓旅非吾輩、
 晚歲簪纓束我身。
 酒散更無同宿客、
 詩成長作獨吟人。
 蘋洲會面知何日、
 鏡水離心又一春。

少年の賓旅は吾が輩に非ず、
 晩歳の簪纓は我が身を束ぬ。
 酒散じては更に同宿の客無く、
 詩成りては長く獨吟の人と作る。
 蘋洲の會面知んぬ何れの日ぞ、
 鏡水の離心又一春。

【字解】【一】郡中、蘇州刺史の役所。
 【二】賓旅、賓友といふが如し。
 【三】簪纓、簪は冠をとめるかんざし。纓は冠の紐。官位に喩ふ。
 【四】知、知らずの意。
 【五】鏡水、鏡湖の水。鏡湖は元暈之の居る越州に在る。

兩處也應相憶在。兩處也應に相憶ふことあるべし。

官高年長少情親。官高く年長じて情親少なり。

【題義】蘇州刺史の役所に唯獨り沈吟してゐる由を述べて越州刺史元稹（字は微之）及び湖州刺史崔玄亮に寄せた詩である。

【詩意】若い賓友もあるが其れは吾吾年寄とは氣が合はず、また老いて官職を帯びてゐるのは何となく束縛を感じる。されば宴が散すれば一緒に宿る客もなく、あとは自分獨りで詩でも吟じてゐる外はない。いつになつたら蘋洲で面會することが出来るであらう。（主として崔湖州に對して言ふ。）鏡湖の水に隔てられて會はないことが既に一年である。（主として元稹に對して言ふ。）僕が君等を憶ふやうに君方も僕を憶うてゐるのであらう。官高く年老いては氣心の合ふ人が少いから。

小舫

小舫

小舫一艘新造了。小舫一艘新に造り了り、

輕裝梁柱庫安篷。輕く梁柱を裝ひて庫く蓬を安んず。

深坊靜岸遊應遍。深坊靜岸遊ぶこと應に遍かるべく、

淺水低橋去盡通。淺水低橋去りて盡く通ず。

【字解】（一）深坊 奥深い町。

黃柳影籠隨棹月。黃柳の影は棹に隨ふ月を籠め、

白蘋香起打頭風。白蘋の香は頭を打つ風を起す。

慢牽欲傍櫻桃泊。慢く牽き櫻桃に傍うて泊せんと欲す、

借問誰家花最紅。借問す誰が家か花最も紅なる。

（二）打頭風 逆風をいふ。

【題義】小舟に乗つて遊んだことを敍した詩である。

【詩意】小舟を一艘造つて梁柱を輕く裝ひ低く屋根を葺いた。この舟に乗れば、如何なる奥深い町でも靜な岸でも遊びまはることが出来る、淺い水でも低い橋でも自由に通れる。新芽の生えた柳の影は棹に隨ふ月を籠め、白蘋の香氣は逆風を捲き起す。緩かに舟を牽いて櫻桃の花の下に碇泊しようと思ふが、どこが一番花が咲いてゐるか知ら。

馬墜強出贈同座

馬より墜ち強ひて出づるとき同座に贈る

足傷遭馬墜。腰重情人擡。足傷きて馬より墜つるに遭ひ、腰重く人を情ひて擡げしむ。

祇合臆間臥。何因花下來。祇合に臆間に臥すべし、何に因りてか花下に來らん。

坐依桃葉妓。行呷地黄杯。坐して桃葉の妓に依り、行きて地黄の杯を呷ふ。

強出非他意。東風落盡梅。強ひて出づるは他の意に非ず、東風梅を落盡すればなり。

【字解】(一) 桃葉 樂府吳聲的歌曲。(二) 地黃 藥草の名。

【題義】馬から墜ちて足腰を傷めたにも拘らず強ひて外出しようとして一座の人に贈った詩である。
【詩意】馬から墜ちて足を傷け、腰が立たないので人に持ち上げてもらはねばならない。だから實は窓の下にじつとして寝てゐればよいので、花観などに出掛けるべきではないのだ。然るに坐しては桃葉歌を歌ふ美妓の側に倚り添ひ、行いては地黃酒の杯を傾ける。強ひて出掛けたのは他ではない。ぐづぐづしてゐる間に春風が梅の花を吹き散らしてしまふからだ。

夜聞賈常州崔湖州茶山境會想羨歡宴因寄此詩

夜賈常州崔湖州の茶山の境會を聞き、歡宴を想羨し、因つて此詩を寄す

遙聞境會茶山夜 遙に聞く茶山に境會せる夜

珠翠歌鐘俱遠身 珠翠歌鐘俱に身を遠る

盤下中分兩州界 盤下中分す兩州の界

燈前合作一家春 燈前合作す一家の春

青娥遞舞應爭妙 青娥遞に舞ひて應に妙を爭ふべし

紫箏齊嘗各鬪新 紫箏齊しく嘗めて各新を鬪はす

【字解】(一) 青娥 美妓。(二) 紫箏 たけのこ。

自歎花時北窗下 自ら歎す花時北窗の下

蒲黃酒對病眠人 蒲黃の酒は病眠の人に對す

時馬嘯掛腰 正動蒲黃酒

【二】蒲黃 治熱利尿の藥。

【題義】夜常州刺史賈君と湖州刺史崔玄亮とが茶山(浙江省吳興縣にあり、前の夜泛三陽隔云云に見ゆ)に相會する由を聞き、その歡宴を想ひて羨望に堪へず、因つて此詩を寄せたといふのである。

【詩意】遙に聞けば今夜君等二人は茶山に會合するさうちやが、定めて珠翠を裝つた美人や歌鐘にとりまかれて一夕の歡を盡すであらう。杯盤の下は常・湖二州の界を中分するも、燈前相遇うては俱に一家の春をなすであらう。して又美妓が各舞うて其妙を鬪はし、共に春筍を食うて各新味を爭ふであらう。實に健康に堪へない。ただ余は花咲く春に遇ひながら、馬から墜ちて怪我をした爲に北窓の下にくすぶつて、蒲黃酒と睨み合つてゐなければならぬのが、如何にも残念至極である。

酬微之開拆新樓初畢相報末聯見戲之作

微之が新樓を開拆し初めて畢りて相報じ、末聯戲れらるるの作に酬ゆ

海山鬱鬱石稜稜 海山鬱鬱として石稜稜

新豁高居正好登 新に高居を豁にして正に好く登る

【字解】(一) 海山 海邊の山。時に元稹之は贈州刺史たり。稜稜はかど立てる貌。

律詩 夜聞賈常州崔湖州茶山境會想羨歡宴 酬微之開拆新樓初畢相報末聯見戲之作

南臨贍部三千界。南は贍部の三千界に臨み、
 東對蓬宮十二層。東は蓬宮の十二層に對す。
 報我樓成秋望月。我に樓成りて秋月を望むを報じ、
 把君詩讀夜回燈。君が詩を把り讀みて夜燈を回らす。
 無妨却有他心眼。妨ぐる無し却つて他の心眼有るを、
 粧點亭臺即不能。亭臺を粧點するは即ち能はず。

【題義】元稹が新樓を築き、工事の初めて畢つたことを告げた詩の末聯に戲言を弄してゐるのに酬いたといふのである。

【詩意】巖石の稜稜たる海邊の山の頂に新に高樓を建て、此に登臨して樂んでゐるさうだが其れは甚だ結構だ。其樓は南は三千里に跨る豐饒な州郡を眼下に見、東は十二層の蓬萊宮に對してゐる。君から新に樓が成り秋月を其上に賞してゐると知らせの詩が來たので、自分は燈を回らして君の詩を讀んで見た。で、かうであらうさうであらうと色色想像を廻らしたが、樓上に美人などを竝べ立てて悦に入つてゐようとは思はなかつた。

病中多雨逢寒食

病中多雨寒食に逢ふ

水國多陰常懶出。水國多く陰りて常に出づるに懶し。
 老夫饒病愛閒眠。老夫病饒くして閒眠を愛す。
 三旬臥度鶯花月。三旬臥して度る鶯花の月、
 一半春銷風雨天。一半春銷す風雨の天。
 薄暮何人吹觱篥。薄暮何人か觱篥を吹き、
 新晴幾處縛鞦韆。新晴幾處か鞦韆を縛す。
 綵繩芳樹長如舊。綵繩芳樹長く舊の如し、
 唯是年年換少年。唯是れ年年少年を換ふ。

- 【字解】
 一 水國 蘇州を指して言ふ。
 二 老夫 樂天自ら謂ふ。
 三 觱篥 樂器の名。
 四 鞦韆 ぶらんこ。
 五 綵繩 ぶらんこの繩。

【題義】病中多雨たまたま寒食(冬至より百五日をいふ)に逢ひ、無聊の狀を述べた詩である。
 【詩意】ここは水國のせみか常に曇りがちで自然と出無精になり、かつ老いて病多くやたらに閑眠を貪つてゐる。鶯花の三十日をむざむざ寝て過ごし、春の半は雨の中に消えてしまつた。夕方になつて誰が吹くのか觱篥の音がする。又雨の晴れ間にあちこちで鞦韆をかけて戯れてゐる。鞦韆の繩や花咲く樹木は、毎年かはりはないが、そこに來て遊ぶ少年は年年換つて行く。俺の年を取るのも無理はない。

清明夜

清明の夜

好風隴月清明夜。好風隴月清明の夜、

碧砌紅軒刺史家。碧砌紅軒刺史の家。

獨遠廻廊行復歇。獨り廻廊を遶りて行きて復歇ふ、

遙聽絃管暗看花。遙に絃管を聽きて暗に花を看る。

【題義】清明（春の氣節の名）の頃の夜の興趣を述べた詩である。

【詩意】風和かに月隴なる清明の夜に、碧砌紅軒の刺史（時に樂天は蘇州刺史である）の家が默然と立つてゐる。我は獨り廻廊を遶つて歩いて見たり、やすんで見たりした。折しも遠方から聞える管絃の聲に情をそそられ、目をとめて暗中の花を看た。

【字解】（一）碧砌 緑の階堂。紅軒は朱塗のノキ。

（二）絃管 管絃に同じ。

蘇州柳

蘇州の柳

金谷園中黃嬭娜。金谷園中黃嬭娜たり、

曲江亭畔碧婆娑。曲江亭畔碧婆娑たり。

老來處處遊行徧。老來處處遊行すること徧きも、

不似蘇州柳最多。蘇州の柳の最も多きに似かず。

【字解】（一）金谷 河南省洛陽縣の西に在り、晉の石崇の園あり。

（二）曲江 石崇の自序に、余有別處、在曲谷洞中、清泉茂樹、衆果竹柏、藥物備具云云とある。隋書はしなやかに垂るる貌。

（三）曲江 長安の東南に在る池の

絮撲白頭條拂面。絮は白頭を撲ち條は面を拂ふ、
使君無計奈春何。使君計の春を奈何ともする無し。

名。都人遊賞の地たり。嬭婆は舞ふ貌。【三】絮 柳の花。柳絮なり。【二】使君 刺史の稱。白樂天自ら謂ふ。

【題義】蘇州の柳の美を贊した詩である。

【詩意】洛陽の金谷園には黄色な新芽の生えた柳がなよなよと垂れてゐた。長安の曲江の亭畔には緑の絲が美しく春風に舞うてゐた。自分は今日まで諸方を遍く遊びあるいて見たが、蘇州ほど柳の美しい處はない。今や蘇州の柳が花は吾が白頭を撲ち、枝は吾が面を拂ひ、蘇州刺史たる吾を惱殺して如何ともする能はざらしめてゐる。

【餘論】これは所謂六句律の體で前二句が對をなし、後四句の對せざるものである。前編卷十三の縣西郊秋寄贈馬造を参照せられよ。

三月二十八日贈周判官

三月二十八日周判官に贈る

一春惆悵殘三日。一春惆悵す殘ること三日なるを、

醉問周郎憶得無。酔ひて周郎に問ふ憶ひ得るや無や。

柳絮送人驚勸酒。柳絮は人を送り驚は酒を勸む、

【字解】（一）周郎 周判官を指して言ふ。

（二）柳絮 柳の花。

律詩 清明夜 蘇州柳 三月二十八日贈周判官

去年今日別東都。去年の今日東都に別れき。

【三】東都 洛陽をいふ。

【題義】寶曆二年三月二十八日に周判官（後集卷五汝南の元範とある人である）に贈つた詩である。
【詩意】悲しいかな今年の春も餘す所僅に三日となつた。さて去年の今日は柳絮に送られ鶯に離杯を勧められて洛陽を發つたのであつた。オイ周郎、君も其時のことを追憶するか。さても歲月の去るのは早いものぢや。

偶作

偶作

紅杏初生葉、青梅已綴枝。

紅杏初めて葉を生じ、青梅已に枝に綴る。

關珊花落後、寂寞酒醒時。

關珊たり花落つる後、寂寞たり酒醒むる時。〔こと遅し。〕

坐悶低眉久、行慵舉足遲。

坐し悶して眉を低るる久しく、行くこと慵く足を舉ぐる

少年君莫怪、頭白自應知。

少年君怪む莫れ、頭白きとき自ら應に知るべし。

【字解】〔一〕關珊 衰落といふが如し。李羣玉の詩に「關珊踏客塵」とある。

【題義】偶然して出來た詩といふ意で、己の衰老を悲んだものである。

【詩意】見れば杏には若葉が生え梅も實を結んだ。花が落ちては春も老け、酒が醒めて一入身の寂寞を感じる。坐しては悶へて眉を低れ、懶くて遊びに出る氣にもならない。君などはまだ若いから、俺の氣分がわかるであらう。

の氣分がわかるまいが、まア俺の意氣地のないのを尤めずに置いてくれ。君も頭が白くなる頃には俺の氣分がわかるであらう。

重答劉和州

來篇云。蘇州刺史例能詩。西掖吟來替左司。又云。若共吳王關百草。不如惟是欠西施。

重ねて劉和州に答ふ。來篇に云く、蘇州の刺史は例として詩を能くす、西掖吟に來つて左司に替はる。又云く、若し吳王と共に百草を關はさば、如かず惟だ是れ西施を欠くと。

分無佳麗敵西施。

分は佳麗の西施に敵する無し、

敢有文章替左司。

敢て文章の左司に替る有らんや。

隨分笙歌聊自樂。

分に隨ふ笙歌聊か自ら樂み、

等閒篇詠被人知。

等閒の篇詠人に知らる。

花邊妓引尋香徑。

花邊妓引いて香徑を尋ね、

月下僧留宿劍池。

月下僧留まりて劍池に宿す。

可惜當時好風景。

惜む可し當時の好風景、

吳王應不解吟詩。

吳王は應に詩を吟するを解せざるべし。

【字解】〔一〕佳麗 美人なり。

西施は吳王夫妻の寵姫。

〔三〕左司 官名。唐の章服物、詩に巧なり、嘗て左司郎中となる。世に章左司と稱す。貞元中出されて蘇州刺史となる。世因つて章蘇州といふ。

〔三〕等閒 深く意を留めざるをいふ。篇詠は詩篇。

〔四〕香徑 西施の采香徑。自注に館娃宮に在りとある。

〔五〕劍池 蘇州の虎丘山に在る。

采香徑在館娃宮の

律詩 偶作 重答劉和州

【題義】和州刺史劉禹錫から、蘇州刺史例能詩、西掖吟來替三左司とか、若共吳王三闖百草、不惟是欠三西施などといふ詩を寄せたので、樂天が重ねて此詩を作つて答へたのである。

【詩意】折角の御詞ではあるが、我には西施の如き美人もなく、韋應物の如き文才もない。ただ分相應に笙歌して聊か自ら樂み、ふと吟詠した詩篇が人に傳誦せられるだけのことだ。併し花邊妓に伴つて采香徑を尋ね、月下に僧を留めて劍池に宿し、昔ながらの好風景を我が物顔に賞してゐる。惜むらくは吳王は詩を解する能力を持たなかつたであらう。して見れば詩を解するだけ我の方が吳王に勝るともいへよう。

奉送三兄

三兄を送り奉る

少年曾管二千兵。少年曾て二千の兵を管す、
 晝聽笙歌夜斫營。晝は笙歌を聽きて夜は營を斫る。
 自反丘園頭盡白。丘園に反りてより頭盡く白し、
 每逢旗鼓眼猶明。旗鼓に逢ふ毎に眼猶明かなり。
 杭州暮醉連牀臥。杭州の暮醉牀を連ねて臥し、
 吳郡春遊竝馬行。吳郡の春遊馬を竝べて行く。

【字解】(一) 丘園 故郷。
 (二) 杭州 樂天嘗て杭州刺史たり。
 (三) 吳郡 蘇州なり。時に樂天は蘇州刺史たり。
 (四) 阿連 謝靈運の族弟惠連。南史謝靈運傳に、阿連不爲三父方明所知。靈運謂三父方明曰、阿連才情如此、而尊作三兄見之過之とある。此、

自愧阿連官職慢

自ら愧づ阿連官職の慢なるを、

只教兄作使君兄

只兄をして使君の兄とならしむ。

【題義】三は排行であらう。兄を送る詩である。兄の名は何といふか詳ならず。但し幼文でないことは明かである。幼文は元和十二年に死んだのであるから。

【詩意】吾が兄は少年の頃に二千の兵を督する部將となり、晝は笙歌を聽いて風流の樂をなし、夜は勇を振つて敵營を斫るといふ英將であつた。頭髮が白くなつてから罷めて郷里に歸つたが、それでも旗鼓を見れば猶眼の色を變へる位の餘勇を持つてゐる。自分が杭州刺史であつた頃には夜酔うて寢臺を連ねて眠り、今は蘇州に於て馬を竝べて春遊を俱にする。ただ弟たる自分は遺憾ながらいつも官職が卑いが、ただ吾が兄の如き人を兄として持つてゐることは吾が誇である。

城上夜宴

城上夜宴

留春不住登城望。春を留むれども住まらず城に登りて望む、
 惜夜相將秉燭遊。夜を惜みては相將りて燭を秉りて遊ぶ。
 風月萬家河兩岸。風月萬家河の兩岸
 笙歌一曲郡西樓。笙歌一曲郡の西樓。

律詩 奉送三兄 城上夜宴

詩聽越客吟何苦。詩は越客の吟を聴くに何ぞ苦しき。
 酒被吳娃勸不休。酒は吳娃に勸められて休まず。
 從道人生都是夢。從道 人生都て是れ夢、
 夢中歡笑亦勝愁。夢中の歡笑は亦愁に勝れり。

【字解】(一) 吳娃 吳の美女。
 (二) 從道 いふにまかす。いはば
 いへとの意。

【題義】城上夜宴の興を述べた詩である。

【詩意】春の名残を惜んで城に登つて望み、夜まで燭を乗つて遊んだ。風月に照され河の兩岸に立ち
 ならぶ萬家の夢を眺めつつ、蘇州城の西樓で一曲の笙歌を奏し、越客の苦吟を聴き吳娃の勸むる杯を
 傾けるのは實に愉快である。人生は一場の夢のやうな果敢ないものだと言はば言へ。夢中にもせよ歡
 笑するのは愁嘆するよりましである。

重題小舫贈周從事兼戲微之

重ねて小舫に題し周從事に贈り兼ねて微之に戲る

細篷青篋織魚鱗。細篷の青篋魚鱗を織り、
 小眼紅腮襯麴塵。小眼の紅腮麴塵を襯す。
 闊狹纔容從事座。闊狹纔に從事の座を容れ、

【字解】(一) 小舫 小舟。(二) 細篷 舟のとま。竹を編んで舟の上
 をおほふもの。青篋は青い竹。(三)
 麴塵 淡黄色。麴は黄をつけること。

高低恰稱使君身。高低恰も使君の身に稱ふ。

【二】 圓狹 ひろさ。【三】 使君
 刺史の稱。樂天自ら謂ふ。【四】 麴
 塵 越州に在る湖の名。塵使は觀察
 使。鏡湖塵使とは、浙東觀察使元稹
 を指す。【五】 大編 大舟。闊狹は
 幅がし廣かす。

舞筵須揀腰輕女。舞筵須らく腰の輕き女を揀ぶべく、

仙棹難勝骨重人。仙棹骨の重き人に勝へ難し。

不似鏡湖廉使出。似す鏡湖廉使出で、

高檣大編鬧驚春。高檣大編春を鬧驚するに。

【題義】重ねて己の乗る小舟に題して周從事(從事は官名。節度の屬官)に贈り、兼ねて浙東觀察使
 元稹に戲れた詩である。

【詩意】蓬の青竹は魚鱗を織つたやうに細く並び、小さな小窓は淡黄色の裏がついてゐる。廣さは纔
 に周從事の座を容るるに足り、高さは丁度僕の背丈ぐらゐである。腰の輕い美女を揀んで舟中に舞は
 せ、身の重い人は漕ぐのに骨が折れて嫌はれる。浙東觀察使の出遊には大舟を泛べて春を騒がし驚か
 すが、僕の舟は身分相當小規模なものだ。

吳櫻桃

吳櫻桃

含桃最說出東吳。含桃は最も東吳に出づと説く、
 香色鮮穠氣味殊。香色 鮮穠氣味殊なり。

【字解】(一) 含桃 櫻桃なり。

微詩 重題小舫贈周從事兼戲微之 吳櫻桃

洽恰舉頭千萬顆。洽恰として頭を舉ぐ千萬顆、
 婆娑拂面兩三株。婆娑として面を拂ふ兩三株。
 鳥偷飛處啣將火。鳥偷み飛ぶ處火を啣み將ち、
 人摘爭時蹋破珠。人摘み争ふ時珠を蹋み破る。
 可惜風吹兼雨打。惜む可し風吹き兼ねて雨の打つを、
 明朝後日即應無。明朝後日即ち應に無かるべし。

【一】洽恰 こみあふ貌。
 【二】婆娑 影の揺く貌。

【題義】 吳即ち蘇州の名産たる櫻桃のことを述べた詩である。

【詩意】 櫻桃は東吳に産するのが最もよいと言はれ、香氣も色合も特にすぐれてゐる。頭を舉げて見れば幾萬粒となくこみあつてなつて居り、二三株の樹が婆娑として面前に立つてゐる。鳥が偷んで飛び去るのは火をくはへて行くやうに見える、人が争つて摘む時は珠を蹋み破るやうである。惜しいかな雨風が烈しいから、明日明後日あたりは皆落ちて影さへ留めぬであらう。

春盡勸客酒

春の盡くるとき客に酒を勸む

林下春將盡。池邊日半斜。

林下春將に盡きんとす、池邊日半斜なり。

櫻桃落砌題。夜合隔簾花。

櫻桃砌に落つる題、夜合簾を隔つる花。

嘗酒留閑客。行茶使小娃。

酒を嘗めて閑客を留め、茶を行るに小娃を使ふ。

殘杯勸不飲。留醉向誰家。

殘杯勸むれども飲まず、留醉誰が家にか向ふ。

【字解】 【一】櫻桃 さくらんぼ。砌は階堂なり。 【二】夜合 合歡花。れむの花。 【三】小娃 小美女。

【題義】 春の盡きる日に客に酒を勸めた詩である。

【詩意】 今日春の盡きる日であるが、早くも夕日が西に傾いた。櫻桃の題が砌に落ちたり、合歡の花が簾を隔てて咲いたりしてゐる。閑客を留めて酒を飲まうと思ひ、先づ少女に命じて茶を供せしめた。處が閑客はいくら勸めても飲まない。一體これから誰の家に行つて飲むつもりなのであらう。

仲夏齋居偶題八韻寄微之及崔湖州

仲夏齋居。偶八韻を題して微之及び崔湖州に寄す

腥血與葷蔬。停來一月餘。腥血と葷蔬と、停め來る一月餘。
 肌膚雖瘦損。方寸任清虛。肌膚瘦損せりと雖も、方寸は清虛に任す。
 體適通宵坐。頭慵隔日梳。體適して通宵坐し、頭慵くして日を隔てて梳る。

律詩 春盡勸客酒 仲夏齋居偶題八韻寄微之及崔湖州

眼前無俗物。身外即僧居。
水榭風來遠。松廊雨過初。
褰簾放巢燕。投食施池魚。
久別閒遊伴。頻勞問疾書。
不知湖與越。吏隱與何如。

眼前俗物無く、身外即ち僧居。
水榭風來ること遠く、松廊雨過ぐる初。
簾を褰げて巢燕を放ち、食を投じて池魚に施す。
久しく閒遊の伴に別れ、頻りに疾を問ふ書を勞す。
知らず湖と越と、吏隱與何如。

【字解】(一) 腥血 魚肉。葷蔬は臭き蔬菜。(二) 方寸心。(三) 僧居 僧庭。(四) 水榭 水亭といふが如し。(五) 湖

【題義】夏の半の頃精進して日を送り、偶八韻十六句の此詩を作つて、越州刺史元稹(字は微之)及び湖州刺史崔玄亮に寄せたといふのである。

【詩意】魚肉や葷菜を避けて食はず、一個月ばかり精進してゐる。それが爲に肉體は瘦せたが、精神は却つて清虚になり、體氣快くして夜どほし坐禪し、懶いので髪は隔日に梳るやうにしてゐる。眼前には俗物があらず、身のまはりは何れを見ても僧庭ばかりだ。水亭には風が涼しく吹き來り、松廊は雨あがりて清らかである。簾を掲げて巢の中の燕を放してやり、食物を投じて池の魚に施しなどして遊び、久しく遊仲間とも別れてゐるので頻りに病氣見舞の手紙ばかり書いてゐる。君等は或は湖州に或は越州に吏隱となつてゐるが、その感興は果して如何であるか。

官宅

官宅

紅紫共紛紛。祇承老使君。
移舟木蘭棹。行酒石榴裙。
水色窓窓見。花香院院聞。
戀他官舍住。雙鬢白如雲。

紅紫共に紛紛、祇みて承く老使君。
舟を移す木蘭の棹、酒を行る石榴の裙。
水色窓窓に見え、花香院院に聞ゆ。
他の官舎に住まんことを戀ふも、雙鬢白くして雲の如し。

【字解】(一) 紅紫 妓女に喩ふ。紛紛は多き貌。(二) 祇承 つつしんで事へる。八君は刺史の稱。樂天自ら謂ふ。(三) 石榴 ざくろ。其花深紅なり。石榴裙とは深紅色のもすぞ。

【題義】蘇州刺史の官舎についての詩である。

【詩意】妓女たちが紛紛として老刺史たる我にちやはやして善く事へ、木蘭の棹を手にして舟を漕いだり、石榴裙をまとうて酌をしたりする。さて又此等の妓院が美しく眼前に竝んでゐて、刺史のおかこひものになつて官舎すまひをしたがるが、刺史は白毛爺で今更どうにもならない。

六月三日夜聞蟬

六月三日夜蟬を聞く

荷香清露墜。柳動好風生。
微月初三夜。新蟬第一聲。

荷香しくして清露墜ち、柳動いて好風生ず。
微月初三の夜、新蟬第一の聲。

律詩 官宅 六月三日夜聞蟬

乍聞愁北客。靜聽憶東京。
 我有竹林宅。別來蟬再鳴。
 不知池上月。誰撥小船行。

【字解】(一) 有。 蓬萊。(二) 微月。 三日月。(三) 北客。 樂天自京而歸。(四) 東京。 洛陽。

【題義】寶曆二年六月三日之夜に蟬の鳴くのを聞いて作つた詩である。

【詩意】蓮の葉が香しく露が滴り、涼しい風に吹かれて柳が動いてゐる。六月の三日月を仰ぎつつ丁度新蟬の聲を聞いた。其聲が忽ち我をして洛陽の舊居を憶はしめた。我は洛陽の竹林中の宅に別れてから既に二年になるが、池上の月を賞しつつ今誰が小舟を漕ぎまはしてゐることやら。

蓮石

蓮石

青石一兩片。白蓮三四枝。
 寄將東洛去。心與物相隨。
 石倚風前樹。蓮栽月下池。
 遙知安置處。豫想發榮時。

青石一兩片。白蓮三四枝。

寄將東洛去。心與物相隨。

石倚風前樹。蓮栽月下池。

遙知安置處。豫想發榮時。

領郡來何遠。還鄉去已遲。

莫言千里別。歲晚有心期。

【字解】(一) 東洛。 東都洛陽。(二) 發榮。 花を開く。(三) 領郡。 刺史になること。(四) 心期。 心中に約すること。

【題義】蓮と石とを洛陽の舊宅に送り、老後の賞翫に供へたことを述べた詩である。

【詩意】一二箇の青石と三四枝の白蓮とを心をこめて洛陽に送つてやつた。石は風前の樹に倚り添へ、蓮は月下の池に栽えさせ、遙に其置場所を指定し、花の開く時の眺を豫想して見た。今はこんな遠方の刺史となり、いつ故郷に歸れるかもわからないが、千里も離れてゐて何になるなどと言ふな。年老いて郷里に歸つた時は此等を賞翫して日を送らうと獨り心に期してゐるのだ。

眼病二首

眼病二首

散亂空中千片雪。散亂空中千片雪。
 蒙籠物上一重紗。蒙籠物上一重紗。
 縱逢晴景如看霧。縱逢晴景如看霧。
 不是春天亦見花。不是春天亦見花。

已上四句。皆病眼中所見者。

【字解】(一) 春天。 春の氣候。

僧說客塵來眼界。僧は客塵の眼界に來るを説き、
 醫言風眩在肝家。醫は風眩の肝家に在るを言ふ。
 兩頭治療何曾瘥。兩頭の治療も何ぞ曾て瘥えん、
 藥力微茫佛力賒。藥力微茫にして佛力賒なり。

【三】兩頭。兩方。醫と僧と。
 【三】微茫。かすか。

【題義】眼病の詩である。

【詩意】空中には千片の雪がちらつくやうに見え、すべて物の上が一枚の紗で掩はれてゐるやうに見える。晴れた日でも霧が深いやうで、春でもないのに物に花が咲いたやうだ。僧に問へば其れは客塵（汗れた心）が眼界を侵すのだといひ、醫者に問へば病氣が肝臓に潜んでゐるのだといふ。因つて雙方の治療を受けても一向快くはならず、藥力は微弱で佛力は速効がない。

（二）

眼藏損傷來已久。眼藏損傷來ること已に久し、
 病根牢固去應難。病根牢固にして去ること應に難かるべし。
 醫師盡勸先停酒。醫師は盡く先づ酒を停めんことを勸め、

【字解】【一】眼藏。佛語。眼は一切の事物を照すること。藏は此心に一切の善法を包藏して餘すなきなり。【二】道侶。道士。【三】龍。

道侶多教早罷官。道侶は多く早く官を罷めんことを教ふ。
 案上謾鋪龍樹論。案上謾に龍樹論を鋪き、
 盒中虛燃決明丸。盒中虚しく決明丸を燃る。
 人間方藥應無益。人間の方藥應に益無かるべし、
 爭得金篋試刮看。争でか金篋を得て試みに刮りて看ん。

樹。南印度の高僧の名。【二】盒中。瓶の中。決明丸は眼病の藥。【三】人間。世間。方藥は藥。【四】金篋。箭鏃に似たる刀。涅槃經に有る人語。良醫、醫者以三金篋一刮其眼膜、使一復明一とある。

【詩意】眼を病んでから既に久しく、病根が牢くなつて容易に直らない。醫者は皆先づ酒を停めるがよいと言ひ、道士は多くは早く官を罷めろと言ふ。机の上に龍樹の書を置いて讀んで見たり、盒中に決明丸を燃めたりしてゐるが、世間の處方はあまり效能がない。どうかして金篋を得て眼を掻いて見ようかと思ふ。

題東武丘寺六韻

東武丘寺に題す六韻

香刹看非遠。祇園入始深。香刹看れば遠きに非ず、祇園入れば始めて深し。
 龍蟠松矯矯。玉立竹森森。龍のごとく矯りて松矯矯、玉のごとく立ちて竹森森。
 怪石千僧坐。靈池一劍沈。怪石千僧坐し、靈池一劍沈む。

詩律 題東武丘寺六韻

海當亭兩面。山在寺中心。

海は亭の兩面に當り、山は寺の中心に在り。

酒熟憑花勸。詩成倩鳥吟。

酒熟して花に憑りて勸め、詩成りて鳥を倩ひて吟す。

寄言軒冕客。此地好抽簪。

言を軒冕の客に寄す、此地は簪を抽くに好し。

【字解】 一、香刹。佛寺。二、紙圓。寺なり。三、煬燭。高く聳ゆる貌。四、森森。茂る貌。五、靈池。蘇州の虎丘山に在る創地。吳地記に秦始皇東遊至三虎丘。求吳王寶劍。虎當墳而踞。始皇以劍擊之。不及。誤中於石。遺跡尚存。劍無復獲。乃隔成池。古號三劍池。とある。六、軒冕客。軒は大夫の車。因つて官職に居る人をいふ。七、抽簪。職を辭して退隱すること。簪は冠をとめるカンゼン。

【題義】 東武丘寺（蘇州に在る寺の名）に題する六韻十二句の詩である。

【詩意】 此寺は見た所では遠くはないやうだが、はひつて見ると境内が仲仲奥深い。松は龍の蟠るが如くに聳え立ち、竹は玉の立つが如くに茂つてゐる。怪石の上には多くの僧が坐禪して居り、劍池と名づくる靈池もある。亭の左右に海が見え、寺の中心に山がある。酒が熟しては花に憑りて勸めて飲ませ、詩が成れば鳥と共に吟する。官職に居る人などが罷めて隱居するには至極適當な處である。

夜遊西武丘寺八韻

舟船轉雲島。樓閣出煙蘿。路入青松影。門臨白月波。魚跳驚秉燭。猿覩怪鳴珂。搖曳雙紅旆。娉婷十翠娥。

舟船は雲島に轉じ、樓閣は煙蘿より出づ。路は青松の影に入り、門は白月の波に臨む。

魚跳りて燭を乗るに驚き、猿覩ひて珂を鳴らすを怪む。

搖曳たり雙紅旆、娉婷たり十翠娥。

香花助羅綺。鐘梵避笙歌。

香花羅綺を助け、鐘梵は笙歌を避く。郡を領して時將に久しからんとす、山に遊ぶこと數幾何ぞ。

一年十二度。非少亦非多。一年十二度。少きに非ず亦多きに非ず。

【字解】 一、羅綺。羅はたなびくつたがづら。二、鳴珂。くつわをならす。三、搖曳。たなびく貌。四、娉婷。たなやか。五、旆。軍旗は美妓。六、羅綺。うすぎわの著物。七、鐘梵。鐘や磬の聲。八、笙歌。刺史になる。

【題義】 夜西武丘寺に遊んだことを賦した八韻十六句の詩である。

【詩意】 西丘寺の遠きを厭はず、閑に乗じて一たび遊んだ。舟が雲島をめぐつて現れ、煙蘿の中から樓閣が聳え立ち、青松の間の道を進めば月を浮ぶる池の邊に門がある。魚は燭火の光に驚いて跳り、猿は馬の銜の音を怪んで覗いてゐる。自分は二本の紅旆を立て十人の美妓を伴つて此寺に遊んだ。香花の薫りが薄絹の著物にまつはり、鐘や磬の聲は笙歌を避けて聞えない。自分は蘇州刺史になつ

てから久しくなるが、其間に此山に遊んだことは幾度だか知れない。一年に十二回ぐらゐ行けば、少い方でもなく多い方でもなく、先づ程よい所であらう。

詠懷

蘇杭

蘇杭自昔稱名郡。

蘇杭は昔より名郡と稱す、

牧守當今當好官。

牧守は當今當に好官なるべし。

兩地江山蹋得遍。

兩地の江山踏み得て遍く、

五年風月詠將殘。

五年の風月詠じて將て殘す。

幾時酒盞曾拋却。

幾時の酒盞か曾て拋却せる、

何處花枝不把看。

何の處の花枝か把り看ざらん。

白髮滿頭歸得也。

白髮頭に滿ちて歸り得るなり。

詩情酒興漸闌珊。

詩情酒興漸く闌珊。

【題義】胸中の感懷を詠じた詩である。

【詩意】蘇州や杭州は昔から名高い州で、刺史といへば今日ではかなり幅のきく官職だ。吾はこの二州の刺史として到らぬ限もなく歩きまはり、五年が間風月を吟詠して過ごした。如何なる時でも、

さされた杯なら辭退はせず、何處の花でも折つて見ないものはない。その間にすつかり白毛老翁になりすまして、これから故郷へ歸るのだ。詩情も詩興も盡き果てて。

重詠

重ねて詠す

宜しからず。

日覺雙眸暗。年驚兩鬢蒼。

日に雙眸の暗きを覺え、年に兩鬢の蒼なるに驚く。

病應無處避。老更不宜忙。

病は應に避くるに處無かるべし、老いては更に忙しきに

徇俗心情少。休官道理長。

俗に徇へば心情少く、官を休むれば道理長し。

今秋歸去定。何必重思量。

今秋歸り去ること定れり、何ぞ必ずしも重ねて思量せん。

【字解】【一】雙眸。兩眼。【二】蒼。衰白になる。【三】思量。考慮する。

【題義】重ねて胸中の懷を述べた詩である。

【詩意】日増に兩眼が見えなくなり、年ごとに兩鬢が白くなるには自ら驚くばかりだ。病は避くるに道なく、老いては世事の煩しきに堪へない。俗情に徇へば氣樂であり、官を罷めるのは意味深いことだ。今年の秋はいよいよ官を罷めて故郷に歸ることにきまつたからには、今更思慮分別にも及ばない。

百日假滿

百日假滿つ

心中久有歸田計。心中久しく歸田の計有り、
 身上都無濟世才。身上都て濟世の才無し。
 長告初從百日滿。長告初めて百日の滿つるに従せ、
 故郷元約一年回。故郷は元一年に回るを約せり。
 馬辭轅下頭高舉。馬は轅下を辭して頭高く舉り、
 鶴出籠中翅大開。鶴は籠中を出でて翅大に開く。
 但拂衣行莫回顧。但衣を拂ひ行きて回顧すること莫れ、
 的無官職趁人來。的に官職の人を趁ひて來る無し。

【題義】病を以て百日の休暇を請ひ、その日數も盡きて、いよいよ退官と決したことを述べた詩で、寶曆二年の作である。

【詩意】吾が心中には、久しく故郷に歸臥しようといふ計畫を立ててあつた。身には刺史として民を治める才能もないのだから。で、百日の休暇期限ももうきれるので、一年が中には故郷に歸らうと腹をきめた。轅の下にもがいてゐた馬が自由の身になり、籠の中の鶴が翅を張つて飛び出すやうなわけで、衣を拂つて一目散に馳せ歸らう。官職が人を追つて來る氣遣ひはあるまいが。

九日寄微之

九日微之に寄す

眼暗頭風事事妨。眼暗く頭風ありて事事妨げらる、
 遠籬新菊爲誰黃。籬を遶る新菊誰が爲にか黄なる。
 閒遊日久心慵倦。閒遊日久しくして心慵倦し、
 痛飲年深肺損傷。痛飲年深くして肺損傷す。
 吳郡兩回逢九月。吳郡兩回九月に逢ひ、
 越州四度見重陽。越州四度重陽を見る。
 怕飛杯酒多分數。杯酒の多き分數を飛ばすを怕れ、
 厭聽笙歌舊曲章。笙歌の舊き曲章を聽くを厭ふ。
 蟋蟀聲寒初過雨。蟋蟀聲寒くして初めて雨を過ぎ、
 茱萸色淺未經霜。茱萸色淺くして未だ霜を経ず。
 去秋共數登高會。去秋共に登高の會を數へき、
 又被今年減一場。又被今年一場を減せらる。

【字解】(一) 頭風 頭痛がする

(二) 新菊 九月重陽の頃に咲く花

(三) 吳郡 蘇州をいふ。

(四) 分數 わけまへ。

(五) 蟋蟀 こほろぎ。

(六) 茱萸 ぐみ。續齊諧記に、汝南

桓景隨費長房遊學數年、長房謂之

曰、九月九日汝家當有災厄、宜急

去、令家人各作絳囊、盛茱萸、以

繫臂、登高飲菊花酒、此禍可消、

景如言、舉家登山、夕還家、見雞

狗牛羊一時暴死、長房謂之曰、代之

矣とある。

(七) 登高會 九月九日に山に登り、

菊花酒を飲むを登高會、或は茱萸會

といふ。

【題義】寶曆二年九月九日、重陽の節句に元稹(字は微之)に寄せた詩である。時に樂天は蘇州に、元

續は越州にゐた。

【詩意】視力は衰へ頭痛はする。それが爲にする事なす事妨げられ、折角新菊の花が咲き満ちても見ること出来ぬ。おまけに閒遊も久しいことで氣乗りがせず、飲み過ぎが祟つて肺を痛めた。余は蘇州に在りて再び重陽に逢ひ、君は越州に在りて四度重陽に逢つたから、重陽の會も珍しくなく、相變らずの笙歌も聞き飽き、健康の爲に痛飲するのを恐れ、雨あがりの蟋蟀の聲が寒く、茶黄は霜に遇はないのでまだ色が濃い。さういふ次第で登高の會にも缺席した。去年の秋は君と共に登高の會の場敷を算へて競争したが、今年も右の様な次第で缺席して一場を減じた。

題報恩寺

報恩寺に題す

好是清涼地。都無繫絆身。

好し是れ清涼の地、都て身を繫絆する無し。

晚晴宜野寺。秋景屬閒人。

晚晴野寺に宜しく、秋景閒人に屬す。

淨石堪敷座。寒泉可濯巾。

淨石座を敷くに堪へ、寒泉巾を濯ふ可し。

自慙容鬢上。猶帶郡庭塵。

自ら慙づ容鬢の上、猶郡庭の塵を帯ぶるを。

【字解】(一) 繫絆 束縛する。(二) 閒人 閑人。(三) 容鬢 容顏鬢髮。(四) 郡庭 刺史の役所。樂天は蘇州刺史である。

【題義】報恩寺は蘇州に在り、通元寺或は開元寺とも稱した。この寺に題した詩である。

【詩意】足一步報恩寺の境内に踏み入れれば、誠にすがすがしくして全く世間の累を解かれたやうに感ずる。且晚晴が美しく野寺に照り映え、閑人たる我は飽くまで秋景を賞することが出来る、淨らかな石は敷物を敷くに宜しく、寒泉は手巾を濯ふに宜しい。ただ役所の塵が鬢髮の間に附いてゐるのは、自分ながら恥かしい。

晚起

晩起

臥聽琴瑟銜鼓聲。

臥して聽く琴瑟たる銜鼓の聲、

起遲睡足長心情。

起くること遅く睡足りて心情を長す。

華簪脫後頭雖白。

華簪脱して後頭白しと雖も、

堆案拋來眼校明。

堆案拋ち來りて眼校明なり。

閒上簾輿乘興出。

閒に簾輿に上り興に乗じて出で、

醉回花舫信風行。

酔ひて花舫を回らし風に信せて行く。

明朝更濯塵纓去。

明朝更に塵纓を濯ひ去らん、

聞道松江水最清。

聞道らく松江水最も清しと。

【題義】朝寢をして枕上に明朝行遊の計畫を立ててゐる所の詩である。

律詩 題報恩寺 晚起

【字解】(一) 琴瑟 鼓の音。銜鼓は役所の時を告げる鼓。

(二) 華簪 頭上に挿すカンザシ。冠をとめるもの。

(三) 堆案 机の上に積みかさなつてゐる公文書。

(四) 簾輿 竹を編んで作つた駕籠。

(五) 花舫 美しき舟。

(六) 塵纓 塵にけがれた冠の紐。

(七) 聞道 聞く所に據れば。松江は今の吳淞江なり。

【詩意】寝ながら役所で打つ鼓の音を聴き、睡飽きるほど睡つたので氣持がよい。官を罷めたので(寶曆二年、樂天は病を以て蘇州刺史を免せられた)頭髮こそ白くなつたが、文書を取調べる厄介がなくなつて目は大分視力を回復した。竹輿に乗り輿に乗じて出遊し、舟を回らし風に信せて漕ぎまはすも、今は自由の身である。松江の水は綺麗だと聞いてゐるから、明朝は汗れた冠の纒を濯ひに行かうと思ふ。

自思益寺次楞伽寺作

思益寺より楞伽寺に次りて作る

朝從思益峯遊後 朝に思益の峯に遊びてより後、

晚到楞伽寺歇時 晩に楞伽寺に到りて歇ふ時。

照水姿容雖已老 水に照す姿容已に老いたりと雖も、

上山筋力未全衰 山に上る筋力未だ全く衰へず。

行逢禪客多相問 行きて禪客に逢ひて多く相問ひ、

坐倚漁舟一自思 坐して漁舟に倚りて一たび自ら思ふ。

猶去懸車十五載 猶懸車を去る十五載、

休官非早亦非遲 官を休むること早きに非ず亦遲きに非ず。

【題義】思益寺から更に楞伽寺に到りて宿した詩である。

【字解】(一) 禪客 僧侶。

(二) 懸車 致仕すること。車を懸けて復出でざるを示すなり。七十歳で致仕する定めである。十五載は十五年。樂天時に年五十五。

【詩意】朝思益峯に遊んでから夕に楞伽寺に行つて休息した。水鏡に寫して見ると大分自分も老衰したが、まだまだ山に上る筋力は十分ある。途中で僧侶に遇つて色々な事を語り合ひ、坐して漁舟に倚つて考へた。自分は致仕の年齢までにはまだ十五年ある。今官を罷めたのは早くもなく遅くもない、丁度程よい所であると。

松江亭攜樂觀漁宴宿

松江亭に樂を攜へ漁を觀て宴宿す

震澤平蕪岸 松江落葉波。

震澤平蕪の岸、松江落葉の波。

在官常夢想 爲客始經過。

官に在るとき常に夢想し、客と爲りて始めて經過す。

水面排罾網 船頭簇綺羅。

水面罾網を排ね、船頭綺羅を簇らす。

朝盤鱸紅鯉 夜燭舞青娥。

朝盤紅鯉を鱸にし、夜燭青娥を舞はしむ。

鴈斷知風急 潮平見月多。

鴈斷えて風の急なるを知り、潮平かにして月の多きを見る。

繁絲與促管 不解和漁歌。

繁絲と促管と、漁歌に和することを解せず。

【字解】(一) 震澤 今の太湖なり。江蘇浙江二省に跨る。平蕪は平な草原。(二) 松江 太湖の支流。今の吳淞江なり。落葉波は楚辭湘夫人に嫺兮秋風、洞庭波兮木葉下とあるに本づく。(三) 罾網 よつて網。(四) 綺羅 美服をまとひし歌妓。(五) 朝盤 朝の皿。(六) 青娥 若い美妓。(七) 繁絲 急速に掻き鳴らす絃。促管は急速に吹く笛。

律詩 自思益寺次楞伽寺作 松江亭攜樂觀漁宴宿

【題義】女樂を攜へ漁獲を觀て松江亭に宴宿したといふ詩である。

【詩意】震澤の春草の岸、松江の秋水の波をば、一度探賞したいものだと在官中には冀つてゐたが、今始めて來り賞することが出來た。水面には四手網を張つて魚を捕へさせ、船首には美妓を並び坐せしめ、朝には紅鯉の鱗を皿に盛つて食ひ、夜は燈下に美妓を舞はせて樂む。雁の列の斷えたるを見て風の急なるを知り、湖の平なるによりて月色の殊に明なるを見、漁歌に和することを願みず、どんちやん騒ぎをした。

宿靈巖寺上院 靈巖寺の上院に宿す

高高白月上青林。高高たる白月青林に上る、
客去僧歸獨夜深。客去り僧歸りて獨夜深し。
葦血屏除唯對酒。葦血屏除唯酒に對し、
歌鐘放散只留琴。歌鐘放散只琴を留む。
更無俗物當人眼。更に俗物の人眼に當る無く、
但有泉聲洗我心。但泉聲の我が心を洗ふ有り。
最愛曉亭東望好。最も愛す曉亭東望の好きを、

【字解】(一) 白月 明月。
(二) 葦血 具き野菜や魚肉。屏除は避けて食はないこと。
(三) 太湖 即ち震澤。江蘇・浙江二省に跨る湖水。沈沈は深遠の貌。

太湖煙水綠沈沈 太湖の煙水綠沈沈。

【題義】靈巖寺(蘇州の靈巖山に在る)の上院(本院といふが如し。下院に對する語である。他處に分設せられ、而も尚ほ本寺に隸屬する寺を下院といふ)に宿した詩である。
【詩意】明月が青林の上に高く上る頃には、客も去り僧も歸つて夜更に唯獨り坐し、寺中に住むことなれば葦血を屏けて唯酒を飲み、歌鐘を遠ざけて只琴を存するのみ。眼前には一箇の俗物もなく、泉聲の心を洗ふに足るものがある。殊に夜が明けて東の方を眺めると頗る宜しい。水煙の罩めた太湖が綠を湛へて沈沈としてゐる。

酬別周從事二首 周從事に酬い別る 二首

腰痛拜迎人客倦。腰痛みて人客を拜迎するに倦み、
眼昏勾押簿書難。眼昏くして簿書を勾押すること難し。
辭官歸去緣衰病。官を辭し歸り去るは衰病に緣る、
莫作陶潛范蠡看。陶潛范蠡の看を作す莫れ。

【字解】(一) 勾押 勾は文字の上に通貫の符號をつけること。押は押印すること。(二) 陶潛 晉の陶淵明。官を辭して閑居した人。范蠡は越王勾踐に事へて大功を立て、後官を辭して去つた。

【題義】周從事(從事は刺史の屬官)から詩を贈られたのに酬い、兼ねて別意を述べたのである。
【詩意】腰が痛んで客に迎接するのが大儀であり、視力も衰へて簿書の取調も困難である。官を辭し

て歸ることになつたのは全く衰病の爲で、陶潛や范蠡などのやうな高尚な考からだと思はれては誠に恐縮する。

〔一〕

〔二〕

洛下田園久拋擲。洛下の田園久しく拋擲す、

吳中歌酒莫留連。吳中の歌酒留連すること莫けん。

嵩陽雲樹伊川月。嵩陽の雲樹伊川の月、

已校歸遲四五年。已に校歸る遅きこと四五年。

【字解】〔一〕洛下。洛陽。〔二〕吳中。蘇州。樂天は時に蘇州刺史たり。〔三〕嵩陽。洛陽の東南五十里に在る嵩山の南。雲樹は雲に雙ゆる老樹。伊川は河南の嵩嶽を流るる川の名。

【詩意】洛陽の田園をば久しく擲つて顧みずに置いたから、いつまでも蘇州の歌酒に留連しないで、そろそろ洛陽に歸るつもりだ。嵩山の南の雲樹や伊川の月の勝景も、賞したいと思ひながら、實は四五年既に歸りが後れてゐる。

武丘寺路。去年重開寺路、桃李

蓮荷、約種數千株。

自開山寺路。水陸往來頻。山寺の路を開きて自り、水陸往來頻なり。

銀勒牽驕馬。花船載麗人。銀勒驕馬を牽き、花船麗人を載す。

菱荷生欲遍。桃李種仍新。菱荷生じて遍からんと欲す、桃李種ゑて仍は新なり。

好住湖堤上。長留一道春。好し湖堤の上に住し、長く一道の春を留む。

【字解】〔一〕山寺。武丘寺。〔二〕銀勒。銀のくつわ。〔三〕花船。美しき船。麗人は美女。〔四〕菱荷。ひし、はす。

【題義】武丘寺は蘇州に在り、もと虎丘寺といふ。唐時虎を諱み、改めて武丘寺といふ。

【詩意】武丘寺の路を開通してから、或は水路より或は陸上より、銀の銜をはめた驕馬を牽いたり、花船に美妓を載せたりして屢ここに遊ぶ。水面には菱や蓮が徧く生じ、陸上には桃や李が新に植ゑられた。かくて湖堤の上に常住の春を留めてゐる。

齊雲樓晚望。偶題十韻。兼呈馮侍御。周殷二協律。樓在蘇州。

齊雲樓晚望。偶十韻を題し、兼ねて馮侍御、周、殷二協律に呈す。

潦倒宦情盡。蕭條芳歲闌。潦倒として宦情盡き、蕭條として芳歲闌なり。

欲辭南國去。重上北城看。南國を辭して去らんと欲し、重ねて北城に上りて看る。

複疊江山壯。平鋪井邑寬。複疊して江山壯なり、平かに鋪きて井邑寬し。

人稠過楊府。坊闌半長安。人稠きは楊府に過ぎ、坊闌しきは長安に半す。

律詩 武丘寺路 齊雲樓晚望 偶題十韻 兼呈馮侍御 周殷二協律

六九九

挿霧峰頭沒。穿霞日脚殘。
水光紅漾漾。樹色綠漫漫。
約略留遺愛。殷勤念舊歡。
病拋官職易。老別友朋難。
九月全無熱。西風亦未寒。
齊雲樓北面。半日凭欄干。

霧に挿みて峰頭沒し、霞を穿ちて日脚殘る。
水光紅にして漾漾、樹色綠にして漫漫。
約略遺愛を留め、殷勤に舊歡を念ふ。
病みては官職を抛つこと易く、老いては友朋に別るること難し。
九月全く熱無く、西風亦未だ寒からず。
齊雲樓の北面、半日欄干に凭る。

【字解】(一) 潦倒 老衰の意。官情は官吏かたぎ。(二) 蕭條 物淋しき貌。芳歲は春の時節。(三) 揚府 揚州。(四) 坊市街。(五) 約略 おほよそ。ほぼ。遺愛は仁愛の後に遺留するをいふ。(六) 殷勤 れんごるに。

【題義】蘇州の齊雲樓に上つて夕に四方を望み、因つて十韻二十句の詩を作り、馮侍御(侍御は官名)と周、殷二協律(協律は官名)とに呈したといふのである。

【詩意】老衰して官吏生活がいやになり、四邊は一帶に物淋しき秋となつた。南國(蘇州を指す)を立ち去らうと思つてゐるので、又北城(姑蘇志に、齊雲樓は郡治の後の子城の上)に在り。相傳ふ即ち古の月華樓なりとあり)に上つて眺めた。江山は疊み重つて雄大に城邑は平かに鋪き連つてゐる。人口の多いことは揚州にも勝り、市街の雜鬧は長安の半分ぐらゐである。山の峰は霧に蔽はれ、日光は霞を穿つて照り、水は紅の光を漂はせ、樹は緑の色を廣げてゐる。去つた後に少しでも遺愛を留めたと思ひ、今更に從來の歡樂を追想した。病んで官職を辭するのは易いが、老いて友達に別れるのはつらい。今や秋九月で炎熱は既に去り、風もまだ寒くはない。偶々齊雲樓の北面に上り故郷の空を望んで、半日が間欄干に凭つて離れなかつた。

河亭晴望 九月八日。

河亭晴望 九月八日。

風轉雲頭斂。煙銷水面開。
晴虹橋影出。秋鴈櫓聲來。
郡靜官初罷。鄉遙信未廻。
明朝是重九。誰勸菊花杯。

風轉じて雲頭斂り、煙銷して水面開く。
晴虹橋影出で、秋鴈櫓聲來る。
郡靜にして官初めて罷め、鄉遙にして信未だ廻らず。
明朝は是れ重九、誰か菊花の杯を勸めん。

【字解】(一) 雲頭 雲なり。(二) 重九 九月九日。重陽をいふ。(三) 菊花杯 前の九日客三載之の榮衰を見よ。

【題義】九月八日に河亭の上から四方を眺めて作つた詩である。

【詩意】風向が變つて雲が散り、水煙も銷えて水面がよく見えるやうになつた。橋の形のやうな虹が出て、櫓の聲のやうな雁の聲が聞える。さて自分は刺史の職を罷めて身輕にはなつたが、郷里からは何の音信もなく、あすは重陽であるが、誰とて菊花の酒を勸めてくれる者もない。

留別微之

微之に留別す

干時久與本心違。時を干めて久しく本心と違ふ。
 悟道深知前事非。道を悟りて深く前事の非なるを知る。
 猶厭勞形辭郡印。猶形を勞するを厭ひて郡印を辭す。
 那將趁伴著朝衣。那ぞ將た伴を趁ひて朝衣を著ん。
 五千言裏教知足。五千言裏教を教へ、
 三百篇中勸式微。三百篇中式微を勸む。
 少室雲邊伊水畔。少室の雲邊伊水の畔。
 比君校老合先歸。君に比べて校老ゆ合に先づ歸るべし。

山あり、東峯を太室といひ、西峯を少室といふ。伊水は洛陽の附近の川の名。

【字解】(一)干、時。時に合はんことを求むるを謂ふ。(二)勞、形。身を勞する。郡印は刺史の職ないふ。(三)趁、伴。仲間を隨ふ。朝衣は官吏の服。(四)五千言。老子ないふ。其書五千言より成ればなり。知足は足るを知る。(五)三百篇。詩經ないふ。その篇數、三百五篇ある故なり。(六)式微は詩經邶風の篇名。序に式微、妻侯寓于野。其臣勸以歸也とある。(七)少室。洛陽の近所に當る。

【題義】元稹(字は微之。時に越州に在り)に留別(別れ去る時、留る者にのこすこと)した詩である。
 【詩意】自分は從來時に合はんことを求めて然も事志と違ひ、本意を遂げることが出来なかつたが、道を悟つた今日から見れば馬鹿げた事だと思つてゐる。既に身を勞するを厭うて蘇州刺史を辭したのだから、今更ら官吏仲間にはひつて朝服を著ようとは思はない。老子には足ることを知れと教へてあ

り、詩經には早く歸れと勸めてある。君に比べると僕の方が少し年上だから、君より先に洛陽に歸るのは當然である。

自喜

自ら喜ぶ

自喜天教我少緣。自ら喜ぶ天の我をして緣少からしむるを、
 家徒行計兩翩翩。家徒行計兩ながら翩翩。
 身兼妻子都三口。身と妻子と都て三口、
 鶴與琴書共一船。鶴と琴書と一船を共にす。
 僮僕減來無冗食。僮僕減じ來りて冗食無く、
 資糧算外有餘錢。資糧算へて外に餘錢有り。
 攜將貯作丘中費。攜へ將ち貯へて丘中の費と作さば、
 猶免飢寒得數年。猶飢寒を免るること數年なるを得ん。

【字解】(一)家徒。家族の人。行計は旅行の費用。翩翩は輕疾の貌。(二)兼。與に同じ。杜甫の曲江對酒の黃鳥時兼三白鳥二飛、亦同じ。三口は三人。(三)僮僕。めしつかひ。(四)丘中費。郷里に歸り住む時の費用。

【題義】身の累少きことを喜んだ詩である。

【詩意】天が我をして俗緣少からしめたのは誠に嬉しい。家族の數から見ても旅行費の點から考へて

も至つて手輕である。我が身と妻子と合せて三人、外に鶴と琴書と皆一船に乗せ得る。近來召使の數を減した爲に無厭扶持がいらないから、生活費を控除しても尙餘財がある。これを携へ行きて郷里に歸つてからの費用にすれば、まだ數年間は衣食に窮することはない。

武丘寺路宴留別諸妓

武丘寺路に宴し、諸妓に留別す

銀泥裙映錦障泥。

銀泥裙は錦障泥に映じ、

【字解】(一) 錦障泥 障泥は馬鞍の兩旁に下垂して塵を蔽ふもの。

畫舸停橈馬簇蹄。

畫舸は橈を停め馬は蹄を簇む。

【二】 畫舸 美しき舟。

清管曲終鸚鵡語。

清管曲終りて鸚鵡語り、

【三】 鸚鵡 善種の大馬。

紅旗影動駮輪嘶。

紅旗影動きて駮輪嘶く。

【四】 朱顏 酒に酔うて赤き顔。

漸消醉色朱顏淺。

漸く醉色を消して朱顏淺く、

【五】 翠黛 美妓のまゆすみ。

欲語離情翠黛低。

離情を語らんと欲して翠黛低る。

【六】 使君 刺史。樂天は蘇州刺史なり。

莫忘使君吟咏處。

使君吟咏の處を忘るる莫れ、

【七】 女墳湖 皮陸女墳湖の詩の自注に、吳王葬女之所とある。

女墳湖北虎丘西。

女墳湖の北虎丘の西。

【題義】武丘寺(前の武丘寺路と題する詩を見よ)の路で宴を張り、諸妓に留別(行く者の留まる者に贈るをいふ)した詩である。

【詩意】銀泥の裙が錦の障泥と相映じ(歌妓の馬に乗ることは後集卷五の代賣薪女贈諸妓と題する詩の所で述べた)美妓連が舟や馬で集つて來た。清らかな笛曲が終つて鸚鵡が啼き、紅の旗が動いて馬が嘶く。段段醉が醒めて來て顔色も白くなり、別れの悲しさを述べて小首をかしげた。そこで自分も諸妓に言つた。たとひ我一たび去るとも、女墳湖の北、虎丘の西の我が吟詠して樂んだ場所を忘れてくれるなど。

江上對酒二首

江上酒に對す 二首

酒助疎頑性。琴資緩慢情。

酒は疎頑の性を助け、琴は緩慢の情を資く。

有慵將送老。無智可勞生。

慵の將に老を送らんとする有り、智の生を勞ふ可き無し。

忽忽忘機坐。悵悵任運行。

忽忽として機を忘れて坐し、悵悵として運に任せて行く。

家鄉安處是。那獨在神京。

家鄉は安き處是なり、那ぞ獨り神京にのみ在らんや。

【字解】(一) 忽忽 物を忘るる貌。忘機は勞利を争ふ心なきこと。

【二】 悵悵 見る所なき貌。

【三】 神京 京師をいふ。

【題義】江邊で酒に對して作る。

【詩意】我は酒と琴とを借りて疎頑の性、緩慢の情を補ひ、老を送るに懶く、生を慰むるに智なし。ただ茫然として坐し、運に任せて日を送る。身の安樂を得られる處が我が故郷で、必ずしも都に限つ

たことではない。

〔一〕

久貯滄浪意。初辭桎梏身。

久しく滄浪の意を貯へ、初めて桎梏の身を辭す。

昏昏常帶酒。默默不應人。

昏昏として常に酒を帯び、默默として人に應へず。

坐穩便箕踞。眠多愛欠伸。

坐穩にして箕踞を便とし、眠多くして欠伸を愛す。

客來存禮數。始著白綸巾。

客來りて禮數を存し、始めて白綸巾を著く。

〔二〕

【字解】

〔一〕滄浪意 滄浪は川の名。孟子に、滄浪ノ水清マバ以テ我が體ヲ濯フメク、滄浪ノ水濁ラバ以テ我が足ヲ濯フメシトある。區に任せて無愁自適する意。〔二〕桎梏身 東漢多き官吏の身。〔三〕昏昏 暗愚の貌。〔四〕箕踞 脚を伸ばし尻を据ゑて坐すること。〔五〕欠伸 あくびやのびをすること。〔六〕禮數 禮儀。〔七〕白綸巾 頭巾なり。

【詩意】久しく隱遁生活を送りたいと願つてゐたが、初めて官吏生活から脱することが出来るやうになつた。常に昏昏として酒に浸り、默默として獨り坐し、自由に任せて安坐をかき、眠飽きて欠伸ばかりしてゐる。客が來ると禮儀を整へようとして、あわてて頭巾をかぶるやうな始末だ。

望亭驛酬別周判官

望亭驛にて周判官に酬い別る

何事出長洲。連宵飲不休。

何事ぞ長洲を出で、連宵飲みて休まざる。

醒應難作別。歡漸少於愁。

醒ては應に別を作すに難かるべし、歡は漸く愁よりも少し。

燈火穿村市。笙歌上驛樓。

燈火村市を穿ち、笙歌驛樓に上る。

何言五十里。已不屬蘇州。

何ぞ五十里と言はん、已に蘇州に屬せず。

【題義】蘇州を去るとき望亭驛（江蘇省無錫縣の東南五十里）に至り、周判官（周元範。判官は官名）が詩を寄せたのに酬い、別意を述べたのである。

【詩意】既に長洲を出てから夜どほし酒ばかり飲んでゐるのは餘の儀ではない、醒めては此の地に別れ去るに忍びず、歡情が段段に減じて愁情が増して來るからである。村里を漏れる燈火を見ながら驛樓に上つて笙歌を聞いた。たつた五十里とは言ふものの、既に蘇州ではないと思ふと、何となく別れが惜しい。

見小姪龜兒詠燈詩并臘娘製衣因寄行簡

小姪龜兒が燈を詠する詩并に臘娘が衣を製するを見、因つて行簡に寄す

已知臘子能裁服。已に臘子の能く服を裁するを知る、

【字解】〔一〕小姪 なひ、めひ。

律詩 望亭驛酬別周判官 見小姪龜兒詠燈詩並臘娘製衣因寄行簡

復報龜兒解詠燈。復龜兒の解く燈を詠するを報す。

巧婦才人常薄命。巧婦才人常に薄命。

莫教男女苦多能。男女をして苦だ多能ならしむる莫れ。

【題義】樂天が弟行簡に代つて世話してゐた行簡の子の龜兒は燈を詠する詩を作るやうになり、
娘は著物を縫ふことが出来るやうになつたのを見て、行簡に寄せた詩である。

【詩意】臘娘は衣服を裁縫するやうになり、龜兒は燈を詠する詩を作るやうになつたことを報告す
る。併し巧婦才人は多くは薄命だと謂ふから、あまり多能にはしたくないものだ。

龜兒は樂天の弟行簡の男子で、臘娘は其女子である。

【三】臘子 臘娘なり。

酒筵上答張居士

酒筵の上にて張居士に答ふ

但要前塵滅。無妨外相同。但前塵の滅するを要す、外相の同じきに妨げ無し。

雖過酒肆上。不離道場中。酒肆の上を過ぐと雖も、道場の中を離れず。

絃管聲非實。花鈿色是空。絃管聲は實に非ず、花鈿色は是れ空なり。

何人知此義。唯有淨名翁。何人か此の義を知れる、唯淨名翁有り。

【字解】【一】前塵 佛語。當前の境をいふ。楞嚴經に、佛告阿難、一切世間大小内外諸所事業、各屬前塵とある。【二】外相

外觀なり。【三】酒肆 酒屋。【四】道場 寺。【五】花鈿 前集卷十二、長恨歌に見ゆ。【六】淨名翁 維摩詰をいふ。

【題義】酒席で張居士（居士は佛を奉ずる人の稱）に答へた詩である。

【詩意】佛の道を修するの要は眼前の汗を去るに在るので、外觀はもとの通りでも宜しいのだ。身はたとひ酒筵の上に居るとも、心は常に寺院の中を離れない。管絃の聲を聞いても眞實の聲ではなく、美人を見ても其れは空であるといふ眞義を悟つてゐるのは、維摩居士に比すべき張居士だけである。

鸚鵡

鸚鵡

隴西鸚鵡到江東。隴西の鸚鵡江東に到る、

養得經年嘴漸紅。養ひ得て年を経嘴漸く紅なり。

常恐思歸先剪翅。常に歸らんことを思ふを恐れて先づ翅を剪り、

每因餒食暫開籠。毎に食に餓うるに因りて暫く籠を開く。

人憐巧語情雖重。人は巧語を憐みて情重んずと雖も、

鳥憶高飛意不同。鳥は高く飛ばんことを憶ひて意同からず。

應似朱門歌舞妓。應に似たるべし朱門歌舞の妓、

【字解】【一】隴西 鸚鵡の産地。江東は吳なり。

【三】朱門 朱塗の門。富豪をいふ。牢閉 固くとちこめられてゐる。後房は奥の方の部屋。

深藏半閉後房中。深く藏せられて後房の中に半閉せらるるに。

【題義】鸚鵡を詠じて暗に己の身を嘆じたのである。

【詩意】 關西の鸚鵡が呉に持つて來られ、永く飼はれて嘴も紅になつた。逃げ歸ることを恐れて翅を折り、食に餓えるので時時籠から放す。人は其の人語に巧なことを珍重するが、鸚鵡の方では早く飛び去りたくて啼くのである。此の鸚鵡は丁度富豪の家に召し抱へられ、後庭の中にとちこめられてゐる舞妓のやうなものだ。

聽琵琶妓彈略略

琵琶妓の略略を彈するを聽く

腕軟撥頭輕。新教略略成。

腕軟にして頭を撥ぐることを輕し、新に略略を教へて

四絃千遍語。一曲萬重情。

四絃千遍の語、一曲萬重の情

法向師邊得。能從意上生。

法は師邊に向ひて得、能は意上より生ず

莫欺江外手。別是一家聲。

欺く莫れ江外の手、別に是れ一家の聲。

【字解】 (一) 略略、曲の名。(二) 莫欺、馬鹿にするな。江外手は田舎風の手法。

【題義】 琵琶を彈く少妓の略略の曲を彈くのを聽いて作つた詩である。

【詩意】 腕をしなやかに動かして頭を軽く擧げて、新に覺え込んだ略略の曲を彈く。四本の絃で様様の音色を出し、一曲の中に無限の情思が籠つてゐる。手法は師匠から傳受したものであらうが、その外に自ら新工夫を出してゐる。田舎風などと馬鹿には出來ない。立派に一家の風を立ててゐる。

寫新詩寄微之偶題卷後

新詩を寫して微之に寄せ偶卷後に題す

寫了吟看滿卷愁。

寫し了り吟じて看る卷に滿つる愁

淺紅牋紙小銀鈎。

淺紅の牋紙小銀鈎

未容寄與微之去。

未だ容さず微之に寄せ與へ去るを、

已被人傳到越州。

已に人に傳へられて越州に到らん。

【題義】 新作の詩を寫して元稹(字は微之。時に越州に在り)に寄せ、偶その詩卷の後に書きつけたといふのである。

【詩意】 寫し終つてから吟じて看ると愁が卷に滿ちてゐる。これを紅の料紙に巧に書き寫した。恐らく微之に寄せ與へないうちに、世間に流傳して越州に到るであらう。

【字解】 (一) 牋紙、料紙。銀鈎は書法の巧なるを狀する語。書苑に晉樂府草書絶代。名銀鈎裏尾とある。

吳宮辭

吳宮辭

律詩 聽琵琶妓彈略略 寫新詩寄微之偶題卷後 吳宮辭

淡紅花^(二) 被淺檀蛾。 淡紅の花被淺檀の蛾、
睡臉初開似剪波。 睡臉初めて開きて波を剪るに似たり。
坐對珠籠閒理曲。 坐して珠籠に對して閒に曲を理む、
琵琶鸚鵡語相和。 琵琶鸚鵡語相和す。

【字解】【一】花被 美しき衣服。
淺檀は淺紅色。蛾は蛾眉。
【二】睡臉 睡つた顔。

【題義】 吳王の宮女の様を詠じた詩である。

【詩意】 淡紅の美衣をまとひ淺赭き眉を描き、睡後の目は波を剪つたやうに細い。かかる美人が珠を鑲めた籠に對して歌曲を整へ、琵琶の音と鸚鵡の聲とが能く調和する。

寶曆二年八月三十日夜夢後作

寶曆二年八月三十日夜夢後に作る

塵纓忽解誠堪喜。 塵纓忽ち解けて誠に喜ぶに堪へたり、
世網重來未可知。 世網重ねて來るも未だ知る可からず。
莫忘全吳館中夢。 忘るる莫けん全吳館中の夢、
嶺南泥雨步行時。 嶺南の泥雨歩行の時。

【字解】【一】塵纓 塵に汚れた冠の紐。
【二】世網 世間の煩累。
【三】嶺南 越中をいふ。

【題義】 寶曆二年八月三十日の夜、夢を見た後に作つたといふ意。

【詩意】 官を辭して自由の身になつたのは嬉しいが、又世間の煩累が來はしまいかと案じられる。吳館の中の苦しい夢、越中の泥道を雨を衝いてあるきまはつた時を忘れないやうにしよう。(吳越の地方に刺史として、難儀したのを夢に喻へた。)

與夢得同登棲靈塔

夢得と同じく棲靈塔に登る

半月悠悠在廣陵。 半月悠悠廣陵に在り、
何樓何塔不同登。 何の樓何の塔か同じく登らざらん。
共憐筋力猶堪在。 共に憐む筋力の猶在るに堪へたるを、
上到棲靈第九層。 上り到る棲靈の第九層。

【字解】【一】廣陵 江蘇省江都縣、即ち揚州なり。

【題義】 劉禹錫(字は夢得)と共に棲靈塔に登つた詩である。

【詩意】 半月の間ふらふらと廣陵郡を遊びまはり、どんな樓でも塔でも共に登らない所はない。お互に體力の猶ほ存するを喜んで、遂に棲靈塔の九階目まで上つた。

夢蘇州水閣寄馮侍御

蘇州の水閣を夢み馮侍御に寄す

律詩 寶曆二年八月三十日夜夢後作 與夢得同登棲靈塔 夢蘇州水閣寄馮侍御

揚州驛裏夢蘇州。揚州の驛裏蘇州を夢み、
 夢到花橋水閣頭。夢に到る花橋水閣の頭。
 覺後不知馮侍御。覺めて後知らず馮侍御、
 此中昨夜共誰遊。此中昨夜誰と共に遊べる。

【題義】蘇州の水閣を夢みて蘇州に居る馮侍御に寄せた詩である。
 【詩意】揚州の或る驛で蘇州の夢を見、夢の中で花橋水閣のあたりに遊んだ。目が覺めて見ると馮侍御がゐない。はて昨夜は誰と遊んだのであらうと自ら怪んだ。

【字解】(一) 花橋水閣 吳郡志に戴顓宅北園寺、唐司勳郎中陸滄嘗居之、有三花橋水閣とある。

喜罷郡

五年兩郡亦堪嗟。五年兩郡亦嗟くに堪へたり、
 偷出遊山走看花。偷に出で山に遊び走りて花を見る。
 自此光陰爲己有。此れより光陰己が有と爲る、
 從前日月屬官家。從前日月官家に屬す。
 樽前免被催迎使。樽前には催し迎へらるる使を免れ、

郡を罷めしを喜ぶ

【字解】(一) 兩郡 杭州と蘇州。
 樂天この二州に刺史たること五年なり。

(二) 官家 朝廷。役所。

枕上休聞報坐衙。枕上には衙に坐せよと報ずるを聞くを休む。
 睡到午時歡到夜。睡りて午時に到り歡びて夜に到る、
 回看官職是泥沙。回りて官職を看れば是れ泥沙。

枕上には衙に坐せよと報ずるを聞くを休む。

(三) 坐衙 役所に出動する。

【題義】蘇州刺史を罷めたことを喜んだ詩である。
 【詩意】二州の刺史となつてゐた五年の間は實に嗟かかしい事ばかりで、山に遊ぶも花を見るもおほびらには出来なかつた。罷めて後の歲月は己の所有であるが、罷めるまでの歲月は官有であつた。これからは使者に催促されて酒を中止するやうなこともなく、出勤時間を告げる鼓の音を聞き漏らして寢てゐられる。眠ければ眞午までも寢て、面白ければ眞夜中まで遊んでゐられる。今日から見れば官職といふものは泥か沙のやうなつまらぬものだ。

答次休上人

姓白使君無麗句。姓は白使君麗句無し、
 名休座主有新文。名は休座主新文有り。

來篇云。聞有餘霞千萬首。何妨一句乞三閨人。

次休上人に答ふ。來篇に云く、餘霞千萬首ありと聞く、何ぞ妨げん一句聞人に乞ふるを。

【字解】(一) 姓白使君 使君は刺史の稱。蘇州刺史白樂天自ら謂ふ。
 (二) 名休座主 休といふ名の僧侶。

律詩 喜罷郡 答次休上人

禪心不合生分別。禪心は合に分別を生ずべからず、
莫愛餘霞嫌碧雲。餘霞を愛して碧雲を嫌ふ莫れ。

次休上人をいふ。
【三】分別 是非善惡を差別するこ
と。

【題義】次休上人が詩を乞ひしに答へたのである。

【詩意】白居易には美詩はない。却つて上人は結構な新作があるであらう。禪心は美惡の差別を立てぬものであるのに、餘霞（樂天の詩）を愛好して碧雲（上人の作）を嫌ふとはけしからぬ。

終